

はじめに

日本で暮らす私たちにとって、「仏像」はとても身近な存在です。「仏像ブーム」も何年かごとにくり返し訪れ、仏像に関する書物も多数出版されています。私が担当している「仏教美術史」を受講する学生たちやゼミ生も「仏像好き」が多く、日本の仏像や仏教の歴史について、一通りの知識を備えて入学してきます。

しかし、学生たちと話していると、何となくもの足りなさを感じることがあります。彼ら、彼女らの仏像や仏教の知識は、大学受験用に詰め込まれたもので断片的になっているのです。

たとえば、奈良の大仏は天平てんぴやう時代に建立されたということを知っていても、誰がどんな目的でそれをつくったのか、どんな人がつくり、人々は大仏にどんな影響を受けたのか、などの背景については知らないままの学生が多いのです。

もちろん、学生のせいではありませんし、現在の学生に限ったことでもありません。私

自身、子供の頃、両親に連れられて奈良や京都へ何度も旅行をし、寺院や仏像に親しんではいましたが、仏像が「面白い！」と思ったのは、大学で仏像の「制作背景」や「多角的な鑑賞法」を教えてもらうチャンスに恵まれたからでした。

人に歴史があるように、一つ一つの仏像にも歴史があります。仏像の誕生に関わった人々、誕生時の政治体制や文化をたどっていくと、「日本の歴史」と「仏像」がリンクしてくるのです。

さらに、仏像がやってきた道のりを逆にたどっていくことで、日本と中国、朝鮮半島との交流史を知ることができます。私も大学の学部生、院生時代に中国の仏像を訪ねる旅に出かけ、日本の仏像のルーツに触れることができました。

再び奈良の大仏の例で言えば、突然日本に巨大な仏像が出現したわけではなく、中国の龍門石窟にその手本となる大仏があったことを知ったのです。さらに言えば、平城京の都づくりが、唐の都・長安に倣ったものであり、仏教を中心に据えた当時の政治体制も唐から輸入したことを学びました。

そうしたことが私にとっての「面白さ」であり、それを追いかけていくうち、気づいた

ら「仏像研究」の道に進んでいたのです。現在受けもっている授業では、私なりに学び、体得したことを踏まえて学生たちに伝えていきます。本書はその延長として、すでに学生生活を終えた方や中高生たちにもそれを伝えたい、という思いで執筆しました。

仏教と仏像が日本にもたらされたのは飛鳥時代あすかですが、本書ではその地点から時系列に沿って書き進めていきます。

日本でもっとも古い仏像は飛鳥時代につくられました。制作者は渡来人の子孫でした。当然、仏像の顔つきは日本人離れしています。

つづく白鳳時代はくほうも初唐の仏教美術に倣ったものでしたが、この頃から若干日本風のアレンジが加えられ、顔が童子っぽくなってきました。

天平時代に入ると遣唐使を介した唐との交流が盛んになり、政治体制から仏教寺院のあり方、仏像づくりまで唐の影響を色濃く受けます。盛唐で完成した写実的な仏像も日本に導入されました。

日本が平安時代を迎える頃、隆盛を誇った唐に陰りが見え始め、やがて遣唐使も廃止されます。ここに至って、仏像づくりに変化が表れ、「和様」が始まるのです。この流れは

仏像制作に限りません。あらゆる面で大陸文化から脱出し、日本独自の「和様」が模索されるのです。

仏像においては仏師・定朝じょうちようが日本人好みの柔らかく、かわいらしい仏像を生み出ししていきます。もしかして日本の「かわいい」を好む文化は、ここにルーツがあるのかもしれませんが。

平安時代につづいてやってくるのは、武士による鎌倉時代です。歴史の教科書でおなじみの仏師・運慶がつくる力強い仏像が、この時代に誕生します。この様式は運慶が属していた慶派仏師の好みであったと同時に、政権を握っていた武士たちの好みでもあったと思えるのです。

このように、「仏像」を主軸に変遷をたどっていくと、そのまま日本の時代や文化の変遷をたどることになります。今述べたことは全体像ですので、実際は為政者の思惑や、他国との関係性など、より複雑な時代背景のもとで仏像と仏教は姿を変えていくのです。日本で発刊される仏像に関する書物の大半は、仏像が日本で自律的に発展してきたように記されています。しかし、実際はより多くの事情が絡みあって日本独自の仏像が完成したわ

けです。

今、それぞれの時代の仏像を拝観できる私たちの視点から言えば、時代ごとのポイントを理解することで、その寺院、その仏像に対するロマンが広がります。たとえば飛鳥から白鳳にかけてつくられた仏像に向き合うとき、制作の過程で日本人だけではなく大陸や半島の技術者たちが協力し合い、いくつのも言語が現場に飛び交っていた様子を想像して、私はにんまりしてしまうのです。

— 仏像と向き合うことは、すなわち古いにしえの日本と先祖を訪ねるタイムトリップだと私は考えています。全体の姿から目の表現、身にまもっている衣まで、すべてが時代ごとの歴史と文化を雄弁に語ってくれるのです。装置も費用も不要なタイムトリップであり、想像力を無限に広げてくれる旅だと思えます。

ある調査によると、日本人が仏像を拝する時間は一分三〇秒から三分一五秒だそうです。せめてあと少し時間をかけて、仏像と向き合う楽しさを味わっていただきたい、と願ってやみません。

その仏像の来歴や制作背景に好奇心を向ければ、見慣れたはずの仏像でも、見方、見え

方が変わるだけでなく、その「時代」を仏像が静かに語ってくれると思うのです。

この本の全体を通して私が目指しているポイントを、以下に列記します。

- ① 自分の好きな仏像を見つける。
- ② 仏像を見るだけで、制作年代や仏像の種類が分かるようになる。
- ③ 日本の歴史や仏教と仏像のつながりが分かるようになる。
- ④ 古代日本と東アジア諸国の関係や影響が分かるようになる。
- ⑤ 自分だけの「仏像鑑賞ポイント」をもてるようになる。
- ⑥ 有名な仏像だけでなく近所にある仏像鑑賞も楽しめるようになる。

欲張って六つもあげてしまいましたが、上記の中で一つだけ選べと言われたら、私は迷わず①をあげます。

「何だかこの仏像が好きだ」「この仏像が気になる」という仏像に出会ったら、自分はどこが好きなのか、どんな表現が気になるのかを考えてみてください。

たとえば平安時代の仏師・定朝がつくった仏像を「かわいい」と感じたなら、自分の「かわいい」と思う感覚がどこからきたのか、探ってみると面白いと思います。もし運慶の仁王像を「かっこいい」と思うのなら、自分にとっての「かっこよさ」とは武士の思想に通じるものなのか、などと考えてみるのもいいと思います。

私の場合で言えば、時代ごとの「顔の変遷」に興味がありました。外国から入ってきた仏像ははじめのうちこそ異国の顔をしています。ただ、だんだん日本で見慣れた顔に変わっていきます。その変化は、日本が外国の文化・風習を脱して独自の文化を育んできた歴史とシンクロするの、という点に興味をもちました。

また、菩薩像ぼさつが身につける装身具にも、変遷していくことが分かり、いつから異国の影響を脱して日本独自の表現になったのかも調べたくなくて、仏像研究にハマった経緯があります。

私のように仏像にどっぷり浸かる人を増やしたい、というわけではありません。仏像に何となく興味を覚えているみなさんにとって、仏像がより面白くなるきっかけを本書で見ただけいただければうれしいな、という思いです。

ようこそ仏像の世界に足をお運びくださいました。本書を通じて、読者のみなさんに、新たな仏像との出会いや発見がありますように……心から祈念いたします。

目次

はじめに

3

仏像の世界へ旅立つ前に

18

仏像の種類／伽藍配置の変遷／仏像の元祖は西洋風の顔をした釈迦

第一章 仏像がやってきた！

27

〈飛鳥時代〉 仏像づくりは大陸の模倣から

現存する最古の仏像——飛鳥大仏／国宝に選ばれなかった飛鳥大仏／
飛鳥仏の代表——法隆寺・釈迦三尊像／仏像の正面観照性／

飛鳥仏の源流は中国南朝？ 北朝？／法隆寺・釈迦三尊像の「謎」／

釈迦三尊像の「不思議」な部分／

聖徳太子の「怨念」が込められた？——法隆寺・救世観音菩薩立像／

救世観音で確かめられる仏像の源流／

名称とルーツは必ずしも一致しない——法隆寺・百済観音の故郷は飛鳥／

仏教世界の守護者——法隆寺金堂の四天王像／

飛鳥仏のスーパースター——広隆寺・弥勒菩薩半跏思惟像

第二章

童子風にアレンジしました

～白鳳時代～ 写実表現の模索、仏像の童子化

「白鳳の顔」の基準作例——興福寺・旧東金堂本尊仏頭／

初唐の仏が日本に渡って童子顔になった／

夢違観音が見る「夢」は江戸の風景？——法隆寺・夢違観音菩薩立像／

第三章

やっとできた理想の形

顔もサイズも「童子形」の阿弥陀仏——橘夫人の厨子と阿弥陀三尊像／
いちばん新しい国宝釈迦像——深大寺・釈迦如来倚像／
異国風の顔をもつ四天王像——當麻寺・四天王像

〈天平時代〉 写実表現の完成、素材・技法の多様性

唐から移入した「仏教による政策」と大仏づくり／

東大寺と大仏はなぜつくられたか？／

大仏はなぜ「大急ぎ」でつくられたのか？／

天平生まれの大仏が江戸時代の顔？／新素材と新技法で「写実」が完成／

四天王が動き出した！／鑑真和上坐像が物語る天平時代の日本仏教／

東大寺法華堂（三月堂）は東大寺の前身寺院か？／

天平の一大傑作仏——東大寺・不空絹索観音菩薩立像／

第四章

日本の顔になりました

〈密教系仏像と和様化した仏像〉

〈平安前期〉密教の流行と厳めしい顔の仏像たち

異形の仏像をもたらした新しい仏教／

空海が仏像で表現した理想の密教世界——東寺・講堂の立体曼荼羅／

空海がプロデュースした密教仏を運慶が修理！／

木像仏で霊力を高める／

厳しい表情には理由があります——神護寺・薬師如来立像／

日本古来の神々と仏像の習合／

「秘仏」ゆえに守られてきた天平の「色彩」——東大寺・執金剛神立像／

阿修羅像が眉をひそめている本当の理由——興福寺・阿修羅像ほか／

金剛力士像、阿形と吽形の並び方

遣唐使の廃止で生まれたプレ和様——仁和寺・阿弥陀如来坐像

〈平安後期〉仏像の和様化と寄木造の誕生

平安後期の社会と仏教——浄土信仰の広がりとは仏像の和様化／

仏像の和様化を完成させた仏師・定朝の登場／

日本史上初の和様化した阿弥陀像——平等院・阿弥陀如来坐像／

浄土の使者としての阿弥陀像——三千院・阿弥陀三尊像／

九体阿弥陀と九品浄土／「地獄」に落ちた者を救う地藏菩薩

第五章

武士好みにアレンジしました

鎌倉時代／仏像づくりの一大転換期

仏像制作の一大転換期／慶派の「デフォルメ仏像」は武士好み／

天才仏師・運慶の登場／

第六章

実は興味深い室町時代と江戸時代

運慶様式の確立——願成就院・阿弥陀如来坐像、毘沙門天立像／
運慶仏が「語りかけてくる」もの／快慶が生み出した「安阿弥様」／
極楽から現世へやってきた阿弥陀仏——浄土寺・阿弥陀三尊像／
師匠ゆかりの寺に残した作品群——醍醐寺・弥勒菩薩坐像／
八幡殿の空中に浮かぶ僧侶姿の神——東大寺・僧形八幡神像／
運慶と快慶——その違い／禅宗寺院独特の仏像

庶民や渡来人も仏像づくり／

崇りを鎮め、人々に利益を授ける十一面観音／

長谷寺十一面観音がもたらす御利益／仏像界きつってのインフルエンサー／

隠元禪師が日本に広めた中国式仏像／

江戸時代に大陸の最新様式を伝えた萬福寺の仏像／

東京で見られる黄檗様の仏像

【コラム】

仏像界のインフルエンサー第一号 清涼寺・釈迦如来立像／
遊行僧が各地で彫った素朴な仏像 円空仏、木喰仏

おわりに

仏像のつくり方

255

主要参考文献

261

寺院・仏像一覧

262